新設された診察室（内科１階・総合診療外来）

外来・中央診療棟に 新しい外来の診察室がオープン

診療科の移転に伴い受付の名称を変更

外来・中央診療棟の1階に外来の新しい診察室と処置室を設置する工事が完了しました。平成30年7月より、老年・高血圧内科と神経内科・脳卒中科が移転して診察を開始しています。

本院の内科系の各診療科はこれまで、外来・中央診療棟の2階で外来の診察を行っていました。このたび1階の総合診療外来のエリアにて診察室8室を増設する工事を実施し、7月より内科の2科が診療を開始する運びとなりました。診察待ちの患者さんが順番を確認できる外来案内表示盤システムも導入しています。新たな処置室も設置し、現在より広いスペースで患者さんの点滴や採血といった処置に対応できるようになりました。これまで処置室として使用していた部屋は、標準より広い面積を確保した診察室として、学生の実習などに活用します。

これまで内科西外来で診察していた老年・高血圧内科と神経内科・脳卒中科は、7月より1階の新しい診察室に移って外来の診療を行っています。また内科西外来の空いた診察室を活用し、これまで内科東外来を使用していた呼吸器内科が内科西外来に移転しました。このほかの内科系の各診療科も、一部で診察室を増加します。

これに伴い、受付の名称を「総合診療外来」から「内科1階・総合診療外来」に変更しました。また、2階の「内科東外来」と「内科西外来」について、それぞれ「内科2階東外来」と「内科2階西外来」に変更しました。この変更は7月より適用となり、院内の看板や患者さんへの配布物などについても順次更新をしています。

「内科1階・総合診療外来」は正面玄関を入ってすぐの場所にあり、各種の手続きや会計の窓口とも近いため、受診される患者さんの利便性が高まることになれば幸いです。なお、従来から総合診療外来で診察をしていた、総合診療科、漢方内科、補完医療外来、禁煙外来などは、受付の名称が「内科1階・総合診療外来」に変わりましたが、従来と同じ場所で診療を継続しています。

患者さんには外来の受付場所や診察室が変更になり、当初はご不便をおかけすることもあるかと存じますが、ご理解をいただきますようお願いいたします。院内の各所や病院のホームページに移転に関する案内を掲示しておりますのでご覧ください。

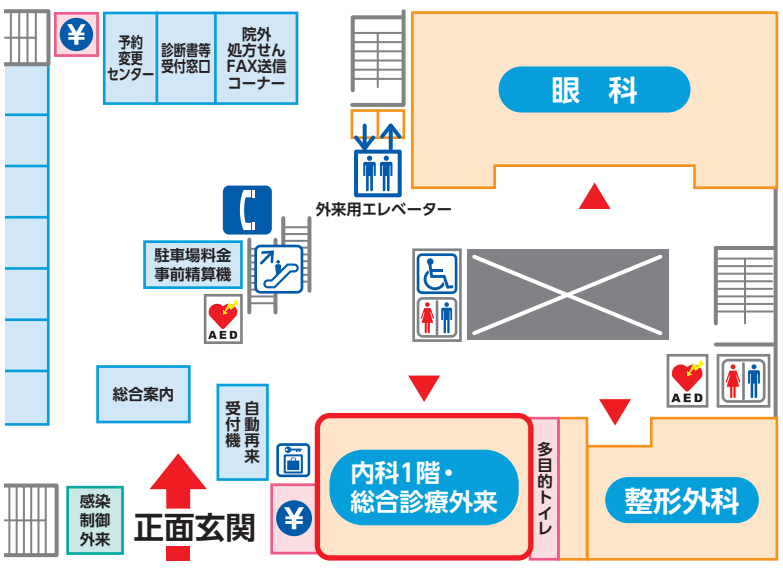
新設された処置室（内科１階・総合診療外来）

●受付の名称変更

総合診療外来	➡	内科1階・総合診療外来
内科東外来	➡	内科2階東外来
内科西外来	➡	内科2階西外来

●診療科の移転

老年・高血圧内科 神経内科・脳卒中科 呼吸器内科	➡	内科1階・総合診療外来へ 内科2階西外来へ



外来棟１階図

ピクトグラムの作成について

入院患者さんの元には、さまざまな医療者が訪問します。入院患者さんが消毒薬やラテックスなどのアレルギーをお持ちの場合や、病気や治療によって「右上肢では血圧測定できない」などの場合、医療者が一目でわかるようにピクトグラムを作成し、ベッドサイドに掲示することにしました。

ピクトグラムとは、「絵文字」「絵言葉」と言われ、何らかの情報や注意を示すために表示する視覚記号（サイン）の一つです。デザインは大阪大学広報企画本部クリエイティブユニットに依頼しました。

今回「アルコール使用禁止」「ラテックス使用禁止」「右上肢処置禁止」「テープ類かぶれ注意」など８種類を作成しました。ピクトグラムをベッドサイドに掲示することで、安全・安心な医療の提供につながればと考えています。

阪大病院NEWS
No. 71 号
OSAKA UNIVERSITY HOSPITAL
2018（平成30）年7月25日発行
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会（総務課）
住所／〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-15
TEL／06-6879-5021
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp
禁転載（この紙面は再生紙を使っています）

入院待ちの解消に向けた取り組み

以前から本院では、設置している病床を効率的に活用し、患者さんにできるだけお待たせせずに入院していただけるよう努めてきました。原則、診療科ごとに入院する病棟が決まっていましたが、平成30年4月から複数診療科を一つのグループにして３～４病棟を担当する制度を導入しました。同じ病気でも違った病棟に入院されることがある形です。一つのグループでも一般的な大きさの病院並みの150～200の病床数ですので、この大きさが効率的に入院日を決定できると考えての変更です。開始されたばかりの制度ですが、病状に即して必要な時期により迅速に入院していただけるとともに、毎日起こりうる緊急入院への対応力も高めることを目指します。

以上、制度変更の趣旨をご理解いただきたくお知らせいたします。

阪大がんサロンイベント開催

6月22日、オンコロジーセンターがん相談支援室主催で第８回阪大がんサロンを開催しました。今回は栄養管理室の白波瀬景子栄養士を講師に「簡単な工夫で食べやすく！食事のワンポイントアドバイス♪」というテーマで講演を行いました。

消化のしくみや栄養素の役割、どの食材にどんな栄養素が含まれているか、バランスの良い食事の具体例、がん治療法ごとの代表的な副作用に応じた食事の工夫など、患者さんから多く寄せられる相談に応じた内容で、参加者の方々は熱心にメモを取り、質疑応答にも積極的に参加されていました。

終了後のアンケートでは「具体的なレシピが知りたい」「現在の食事と比較できてとても参考になった」などのご意見をいただき、改めて栄養に関する情報のニーズの高さを感じました。がん相談支援室では今後も患者さんの生活、闘病を支えるために様々な企画を実施します。なお、次回は以下の内容で開催する予定です。詳細については、ＨＰ等をご確認ください。

テーマ
知ってて良かった！
「病気と仕事」に関するお話

日　時
平成30年10月19日（金）
13:00～15:00

場　所
オンコロジーセンター棟5階
キャンサーボードホール

対象者
当院で治療中のがん患者さん
及びご家族

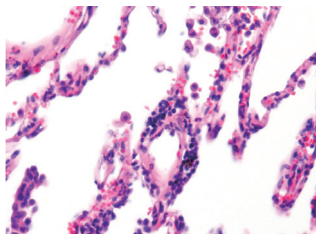
講　師
関　孝子先生
（大阪府社会保険労務士会）

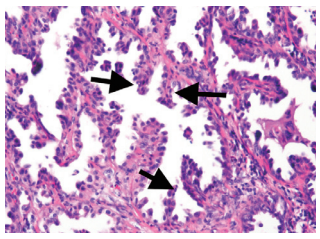
1細胞レベルで観察して的確な治療方針決定

病理診断科

診療科とのカンファレンスによる病理診断の様子

病理診断科では、患者さんから採取された検体を顕微鏡で観察し病名を診断しています。1細胞レベルで観察できるため精度が高く、的確な治療方針の決定に必要です。当科では現在16名の医師が所属しており、このうち10名が専門医のライセンスを有しています。病理専門医は全国で2千名あまりと少ないにも関わらず、本院では多くの病理専門医が所属し日夜診断を行なっています。また、患者さんからより侵襲の少ない方法で採取する検体として細胞診検体があります。細胞診では腫瘍の有無などを比較的容易に判定できます。現在、組織診断は年間1万2千件あまりですが、細胞診も同程度以上の件数があります。病理医が診断する前に、スクリーニングとして細胞検査士が細胞診検体を予め確認していますが、現在、資格をもった細胞検査士が6名所属しており、病理専門医とタッグを組んで診断業務を行っています。


肺胞の中には空気が入っており、通常その平面は平滑です。


通常平滑な表面をもつ肺胞ですが、そこに乳頭状に増殖する腫瘍細胞を認めます(矢印)。肺腺癌の中の乳頭型に分類される腫瘍です。

近年のがんゲノム医療でも、病理診断は重要な役割を果たしています。がんゲノム医療では、病理検体からDNAやRNAを得て異常の有無を調べることが求められます。この時、検体中に腫瘍がほとんど存在しなければ異常を検出できません。このため、検体中にどの程度腫瘍細胞が存在するかなど、多数の情報が正確な診断には必要で、ゲノム医療に供する検体の質保証が病理医に求められています。さらに、がんゲノム医療中核病院では結果判定のためのエキスパートパネルにも複数の病理医参加が求められています。このように新たな波が医療に訪れても、そこにおける病理診断の重要性は変わらず、常に支える立場で医療に貢献しています。

日々、多くの検体を扱っていることから、検体の取り扱いについては特に万全の注意を払っています。当科では早くからバーコード管理システムを導入し、検体の取違いを防ぐ仕組みを構築しています。様々な操作を自動で行える状況を整えており、できるだけヒューマンエラーを防ぐ努力をしています。精度管理でも高い基準が求められており、ISO15189の国際認証を受けています。また本院では臓器移植を行っている関係で、緊急性を要する標本作成がルーチンで求められています。そのため、受付から診断までを3時間で行えるシステムも整えています。

正確な病理診断を行うためには、臨床各科と緊密な情報共有が必要です。臨床とのカンファレンスを多数行うことで、頻回に情報交換を行い、一刻も早く正確な診断が患者さんのもとに届けられるように日夜努力しています。

難病の情報提供や新しい医療開発に27診療科で統合的に取り組む

難病医療推進センター

大薗恵一センター長・望月秀樹副センター長

筋萎縮性側索硬化症(ALS)、潰瘍性大腸炎、パーキンソン病など、日本における指定難病は331疾患、小児慢性特定疾病も756疾患に増加しています。難病医療推進センターは、これら難病に関する、より適切な情報や治療法の開発などを目的として平成28年に設立され、院内27診療科が連携し体系的診療にあたっています。

また本院は、遺伝学的解析などを含めた総合的診断により、希少・未診断疾患の研究を推進する「IRUD(未診断疾患イニシアチブ/日本医療研究開発機構)」の地域拠点病院となっています。難病患者、医療機関、行政などをつなぐ窓口業務を担っているほか、地域の「難病患者在宅医療支援事業(大阪府)」にも平成26年度から携わっています。これは、本院を受診した難病患者さんが地域の医療機関で治療・ケアを受けながら、安心して在宅による療養生活が続けられることを目的としています。平成29年度には44件(平成27年から計209件)の患者さん宅を訪問し、かかりつけ医との合同診療を実施しました。患者さんや家族の心理的サポート、かかりつけ医の専門知識向上に役立つと好評です。

また今年2月には、大阪大学がIRUD解析センターのひとつとして採択されました。網羅的遺伝学的解析が必要と判断された症例について、遺伝子の塩基配列を高速に読み出せる次世代シークエンサーを用いたゲノム解析を学内で実施できるため、これまでより短時間で診断結果が得られるようになりました。

難病の原因解明や、先進医療の開発、創薬には、多くの症例と情報が必要となります。個々の難病の診療については、地域の医療機関やかかりつけ医から、該当する診療科にご相談いただいておりますが、当センターの外部ホームページ(http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp/departments/intractable_diseases.html)において、難病に関する情報も発信しています。難病患者さんにご協力をいただきながら研究を推進し、新しい治療法や確実に効く薬を開発し提供することが当センターの使命です。苦しんでおられる患者さんに希望を届けられるよう、今後、難病に関する医療体制や情報を統合しながら、当センターの存在を積極的にアピールしていきたいと思っています。

ホスピタル ミニ・ニュース

PHOTO TOPICS

4/2「ミート・ザ・プロフェッサー」開催

初期臨床研修開始日の4月2日、新研修医歓迎会「ミート・ザ・プロフェッサー」を14階スカイレストランで開催しました。この催しは研修医と指導医との親睦を深めることを目的に毎年行っているものです。研修医が自己紹介で今後の抱負を述べ、引き続いて交流の場となりました。研修医が指導医に研修内容やキャリアパス等を相談する、研修医がお互いに交流を深める、など和やかな光景が見られ、本院での臨床研修がスタートしました。

7/6「七夕コンサート」開催

大阪大学医学部合奏団による合奏と合唱を多くの患者さんが楽しまれました。

阪大病院を見学してみませんか

本院では、下記のとおり見学会を開催いたします。普段は見ることのできない場所の見学や最先端の医療に触れるチャンスですので、お気軽にご参加くださるようご案内いたします。

●**実施日時**　9月26日(水)14時～16時30分
●**申込締切**　9月5日(水)**必着**
●**対 象 者**　一般市民(成人、個人)
●**募集人員**　15人
必要事項(①氏名　②性別　③年齢　④郵便番号　⑤住所　⑥電話番号　⑦あなたが阪大病院に抱くイメージ　⑧見学を希望する理由)を明記のうえ、はがき、FAXまたは電子メールによりお申し込みください。**必要事項に不備がありますと、こちらから連絡できないことがありますのでご注意ください。**
(※いただいた個人情報は本見学会以外の目的には使用いたしません)

●**送付先(問い合わせ先)**
〒565-0871　吹田市山田丘2-15
大阪大学医学部附属病院総務課広報評価係
TEL:06-6879-5020、5021
FAX:06-6879-5019
(※非通知設定のTEL/FAXからは頭に186をつけておかけください)
e-mail:ibyou-soumu-kouhyo@office.osaka-u.ac.jp

●**見学場所**　ドクターヘリ、臨床検査部など
(※都合により見学場所が変更になる場合があります)
●**決定通知**　応募者多数の場合は抽選により決定し、参加の可否をはがきでお知らせします。
●**注意事項**　**見学では、かなりの距離を歩きます。**階段の昇り降り等もありますので、歩きやすい靴でお越しください。

栄養マネジメント部

下村部長おすすめ スマイル御膳

～お品書き～
●ターメリックライス
●カレー ●グリル盛り合せ
●サラダ ●デザート

今回は、魔法の調味料「ガストリック」(酢や砂糖などで作ったもの)を使用したキーマカレー。病院食としては初めて、ターメリックライスとともに提供しました。患者さんからは、「ふたを開けた瞬間、ヤッターと思いました！」「カレーの材料が細かく刻まれていて手間暇かかっていますね」「カレーとターメリックライスがよく合っていておいしかった」など嬉しいご意見をたくさんいただきました。